



「僕らの行く先には 地図なんかないし それが正しいのか 誰もわからないし ただ生きているから 待ち望んじゃいけない 生きてる意味は 自分で創る 今日から始まる物語 僕を見守る あの人のためにも 強く生きる 忘れない いつかの僕が あなたの横で アリガトウト 笑顔で言うため 今は 旅に出るよ どんな時も ただ何度でも 夢見る強さを」

Greenの「始まりの唄」の歌詞です。

この世に生まれた時から、私たちの人生はどうなるかわからない。地図もなければ、コンパスもない。迷って、傷ついて、泣いて、笑って、助けられて、助けて、たくさんの人と出会って生きています。なんてこんなことが起こるんだろうと、恨むこともたくさんある。生きていくことは、その繰り返しです。

4月末には報恩講が勤まりました。コロナ前のように、御斎をみんなでいただく時間もありません。報恩講とは、浄土真宗の宗祖親鸞聖人の御恩に報いる集まりのことです。親鸞聖人は、歎異抄のなかにこう書かれていらっしゃいます。

「煩惱具足の凡夫(ぼんのうぐそくのぼんぶ)、火宅無常の世界(かたくむじょうのせかい)は、万のことも皆もって空事(そらごと)・たわごと・真実あること無きに、ただ念仏のみぞまことにて在します。」

「欲、怒り、愚痴いっぱいの人間が、火のついた家にいるような不安いっぱいの世界に生きています。それに一切の例外はない。そんな世界に住んでいる人間が、ただ一つ、本当の幸せになれる道があるのですよ」

難しいことはわからないのですが(笑)どんな人間でも、欲も怒りも口もありません。先のわからない未来は不安です。ですが、最初に書いた歌詞のように、人生をかけて説かれた教えを聞いて、自分なりに一生懸命生きること、自分は一人で生きているのではないこと、そして誰かから思われているその気持ちを忘れないこと。

結婚式や、ご葬儀や、ご法事は、コロナ禍で大きく変わってしまいました。人と人が出会うことが、誰かの話を傾けることが、少なくなりました。人間関係も。それももう一度考え直すことも、親鸞聖人の恩に報いることかもしれません。



つれづれに

報恩講の準備から当日まで、本当に多くの方々にお手伝いいただき、ありがとうございました。なんとか無事に終えることができましたこと、総代の皆様をはじめ、ご門徒の皆様にご心よりお礼申しあげます。

5月。母の日。堤会長さんから、写真をいただきました。だいぶ前に一緒に旅行に行った時の写真だとか。倒れて1日でお浄土へ還った母は、棺のなかでも相変わらずよくかでした。十一月にインフルエンザに数十年ぶりにかかりました。裏の家で自主隔離をしている私に、住職である父が買ってきてくれたお弁当は「チキン南蛮」…。母親だったら絶対買ってこないものでしょうが、一応私の好物は父は知っていたようで。「お父さん」と「お母さん」の違いを改めて感じた出来事でした(笑)

父の姉がこの数ヶ月来てくれて、父のお守りをしてきています。母もそうでしたが、兄弟の前では、「弟」「妹」になります。それがちょっとウケます。「自分」が「自分」でいられる場所というのはそう多くありません。どこかで気をはらなきゃいけなかったり、立場があったり。母を亡くしてから、父はその場所を、一番大きなその場所を失い、祖母が亡くなってから、また失いました。その気持ちは、父より少し早く大事な人を亡くした私は、少しだけわかる気がします。

春休みから京都の甥が来て、そして今鹿兒島に行っているのんちゃんが少しだけ還ってきていました。のんちゃん、じいちゃん、おしりをふいてもらうのもじいちゃんじゃなきゃダメでした(笑)私たちが育てている時は、きつとそんなことしていいはず(笑)甥っ子は、知恵がついてきて、上手にじいちゃんにねだっていました(笑)こうやって繋がれていく命と笑顔を、どうかして大事にしたいと思っています。



大和町

鷹尾

因福寺

76-

0433